●モノグラフ 小学生ナウ

ケンカ

vol.2-12

©1983(株)福武書店 教育研究所/加藤智穂・賀川雅子
東京学芸大学助教授 深谷和子・千葉県教育センター 中原美恵

目次

特集／ケンカのすすめ …… 2

調査レポート／ケンカ

要約と提言 …… 8

1.子どものケンカ体験 …… 10
- 友だちと比べて …… 11
- この1か月で …… 13
- きょうだいゲンカ …… 16
- 生まれてから今までに …… 17

2.ケンカ体験と心のうち …… 21
- 生活の中のストレス …… 21
- なぐりあいをしない理由 …… 26

3.ケンカの意味 …… 29
- ケンカする子どものプロフィール …… 30
- ケンカが起こった時 …… 32
- ケンカの周辺 …… 33

まとめに代えて …… 37

シリーズ／子ども考現学

子どもの姿・昔と今(10) 通学服 …… 38

資料1・調査票見本 …… 43
資料2・学年・性別集計表 …… 49

特集●

ケンカのすすめ

東京学芸大学助教授　深谷和子

ケンカのルール

少し年輩の男性に聞くと、昔の男の子だちの中には、ケンカの時にルールがあったのだと言う。例えば

○　年少者や女の子はいじめない

○　数人で1人をいじめるようなことをしない

○　武器(石や棒など)を使わない

○　後からふいになぐりかかったりしない

こうしたルールが、当時の日本では地域を問わずに、男の子たちの間に共有されていたのだと言う。ルールそのものがあまり立派すぎる感じで、本当かなと言ってみたくなるが、本当だと言う人びとは多い。

東京の山手で育った筆者は、むろんこのルールを知らない。女の子だからケンカを悪い

ことだと言われ、抑えられて育った。その筆者が、中学に入学して、いちばん驚いたのは、男子たちのケンカだった。当時高等師範の附属であったこの中学は、ずっと男子校の伝統を保っていて、筆者が入学したのは、共学になった2年目。つまり、あたりには男子校としての文化が脈々としていた感じであった。教室の中で男子どうしのケンカが始まると、パッと机と椅子が片づけられ、すもうの土俵ぐらいの空間が鮮やかな速さででき上がる。まわりに仲間たちが、山を作る。つまりケンカをそこで十分やらせようという場が作られ、男の子たちが横っ飛びに飛んで集まって来て見物をするのである。

女の子たちは、はじめのうち先生に言いに行こうとしたり、「いゃあね、やめなさいよ」などと、お姉さんぶって言いかけたのだが、男の子たちのケンカの場には、何かリンとした空気がただよっていて、それをさせないものがあったように思う。そのうち、ケンカが始まって、男の子のオッチョコチョイが横っ飛びに飛ぶと、女の子たちは知らん顔をして、その場を離れるようになっていった。しかしそのケンカも、誰かが血を流したとか、目のまわりをまっ青にしたとかしたことはなかったので、不思議に思っていたが、ある時ふと見たら「もうやめろ、そこまで」などと言って、誰かが分けて入っているではないか。しょせん当時のお坊ちゃん連中だから、トコトンまではやらないか、またはやりあっているうちにエスカレートしてきて、流血の気配を感じてくると、周囲でケンカを見ていた連中が、中に入ってチョン、ということだったのだろう。いかにも平和な時代のケンカの姿であった。

ケンカ道を知ること

その後筆者も成人し、職業人となってから、ふと気づいたのだが、女性たちは男性たちに比べて、ケンカのノウハウを知らないで育ってしまう。しかしケンカは仕事をしていれば、つきものとも言えるだろう。子どもの頃と違って、がまんしているのがえらいということでは絶対にないらしいこともわかってくる。しかし、どんな時に、誰と、どんな風に闘うべきかは、ひどく難しいことのようである。

筆者はもともとケンカを嫌いな方ではない。なにしろ「和」という名前を親が付けてくれたのは、父がわりとケンカ好きだったので母が苦労して、「和をもって尊しとす」という聖徳

太子の言葉を娘に託したのだというのだから、その素質はあったのだろう。

ところが結婚してから、何かの時に友だちとやりあっていて、夫が「もうその辺でいいんじゃないの。相手の立場もあるし」と言ったのである。びっくりしたとはこのことを言うのかもしれない。なにしろこちらは、あと一突きで、相手の息の根を止めるところまで、行っていたのである。ここで手を引いたのでは、今まで何のためにやってきたのかわからないではないか。何のためにみすみす手をひいて、ひん死の相手を逃がすのか。

しかし、ケンカ道とも言うべきものに目を開かれたのは、この時からだったと言えるだろう。それからはケンカもだんだん上手になって、必要があれば、友だちのケンカに助っ人に出る、という趣味を持つようになった。それで初めて、あの中学の時の男の子たちのケンカの意味がわかってきた。ケンカをしながら育つのも、社会化（socialization）のプロセスとして、大切な意味を持つのだろう。

最近の筆者のケンカの仕方——と言ってもまだおとなとしては必ずしも成熟したやり方とは言えないのかもしれないが、ざっと次のようなやり方になってきた。

○勝ち目のないケンカはしない。十分な、または八分どおり勝算のある場合だけにする。

○八分まで相手を追いつめたら、そこでやめて、とどめを刺さない。

○そのため、ケンカの相手を選ぶ。すべての相手を次の3種類に分けてある。

①この人とはどんなことがあってもケンカしない。どんなことでも許容しようとする相手。

②必要があればケンカする相手。

③ケンカする相手ではない人（アホらしいから、むきになってかかわり合わない

ようにする）

この中で、私にとって仮にも友人と名の付く人びと、大切な人びとは①か②である。つまり友だちとは、ケンカしないか、時にはケンカもする。他人とはケンカもしない、ということである。これは筆者だけではなく、すべての人がそうなのではなかろうか。

人格形成上重要なケンカ

私事にわたることを書いてきてしまったが、最近の子どもたちの中で、気になることがある。どうもケンカ、子どもたちの間での大立回りが、昔に比べて減ってきたような気がするのだ。その昔私が育った時代は、子どもというものは、やたらに泣いて家に帰ったもののような気がする。とにかく一歩外へ行くと、いつも遊び友だちがウジャウジャで、群れて遊んではいつの間にかケンカになり、家に帰って来ては、また外に出る、といった風景が、子どもたちの日常だったような気がする。

むろん女の子だった筆者のケンカ体験は、ケンカ道のあった男の子たちのそれとは、比べるべくもなく貧弱なものだったから、それらの幼いケンカで、ちゃんとした自己形成がされたのかどうかは自信がない。現に男の子たちと違って、職業人となってから、ケンカの仕方がわからずに困った筆者なのだから。しかしケンカして育った子どもたちは女の子と言えども少なくとも、ケンカに対して過度に抑制的であったり臆病であったりすることはないのではないか。つまり子ども時代のたわいのないケンカでも、その後はまたそうした対立と抗争を忘れて、仲よしにもどるという

体験を持っているからである。つまり筆者もノウハウについては成人してからとまどいもしたが、ケンカが決して一方的に非建設的で破壊的なものとは限らないというケンカ観、またひいては人間関係についての信頼感を持っていたとは言えるかもしれない。

だからもし現代の子どもたちが、昔に比べてぐっとケンカ体験が減っているとしたら、これはやはり憂慮しなければならない問題の1つということになるのではなかろうか。しかもこのことは、ケンカについてのノウハウだけの問題ではなく、その奥にもっと重大なことがかくされているようにも思う。つまり、先に筆者が挙げた、3種類の友人のうち、3番目、つまり形は友人でも中味は「他人」というタイプの友人が、子どもたちの人間関係の

ほとんどになってしまっているのではないか、という危惧である。

健康的なケンカのすすめ

発達心理学の教科書を見てみるとケンカには、

1）積極的なケンカ（自分からケンカをしかける）
2）受動的なケンカ（ケンカをしかけられて、応じる）
3）報復的なケンカ（しかけられたケンカにやり返す）

の3つのタイプがあり、幼児期においてはいずれも積極性、社会性の現れとみなされている。特に、年齢と共に、受動的なケンカは減少傾向を示し（つまりケンカをしかけられても、がまんすることができるようになる）、逆に積極的なケンカは増加する（必要な時は相手を攻撃することができるようになる）ことが見い出されている。

しかも小学校に入ってからは、そのケンカのパターンに成熟が見られるようになる。

つまり

1）体を使っての攻撃
2）言葉での攻撃
3）攻撃行動の抑制

のプロセスである。すなわち必要な時は攻撃をしかけることのできる能力、しかもその表出の仕方をより社会化された成熟したパターンのものにすること、不必要な時は攻撃行動を抑制することのできる能力である。そして子ども時代は、たくさんケンカをし、その中で、より成熟したケンカの仕方を身につけていくという社会性の形成が、発達課題として望まれることなのだろう。

しかしひるがえって現代の子どもたちを眺める時、彼らにケンカが少ないのは、彼らが「社会性」を十分に身につけ、成熟したパーソナリティーの持ち主になっているからだとは思われない。それは

①ケンカが起こるほど対人接触の頻度がないこと
②ケンカが生まれるほど、パーソナリティーの積極性、自主性、自発性が育っていないこと
③他人とのかかわりが薄くて、友だちと本気でケンカするほど親密な関係を持って

いないこと

④ケンカを過度に抑制するようなしつけが支配的であること

のような要因によるものではないかと思われる。いわば他人との浅いかかわりが一般化し、女性文化の支配とも言える社会的状況が、広がっているのだろう。

しかしこうした状況が、決して健康的なものではないことを示す。いくつかの例がある。

今、かなりの学級には、「いじめ」の問題が内包されていると言う。しかも陰湿で、表面化されず、教師は何か大きな事件が起こるまで、その存在に気づかないでいることも多いと言う。子どもたちの方でも、報復を恐れて、教師にも親にもそれを話さないことが多いとも聞く。人間の生活の中にフラストレーションはつきものであり、その解消には多少とも攻撃的行動が使われるものだとすれば、その攻撃の対象を、人ではなく何かの物や価値に、またその方法をより社会化されたスタイルで、または直接人に向ける時も表出の仕方を抑制して(過度にならぬよう手加減して)行うことができるように、その態度を身につけさせていくことも、1つの重要な教育の領域ではないのだろうか。

子どもたちを健やかにはぐくむための、ケンカのすすめ、健康なケンカの仕方の教育の再考が必要な時がきているとも言えるだろう。

調査レポート／ケンカ

千葉県教育センター　中原美恵
東京学芸大学助教授　深谷和子

要約

① 80%

この1か月間に、1度もとっくみあいのケンカをしなかった子どもは80%。軽いロゲンカすらしなかった子どもは30%。全体に子どもたちのケンカ体験は、大きく減っている。
（図4）・（図5）・（図6）

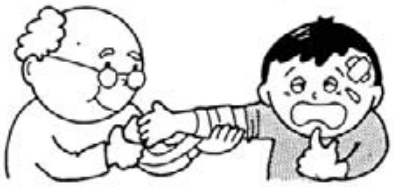
② しょっちゅうしているきょうだいゲンカ

しかしきょうだいゲンカを、しょっちゅうしていると答える子どもが3分の2。友だちとのケンカは減ったが、きょうだいゲンカは今も昔も変わらないようである。（図8）

③ 1対数人のケンカ経験

男子で28%、女子で7%の子どもは、こちらが1人で向こうが数人のなぐりあい（または一方的にやられた）体験を持っている。（図12）

④ ケガをさせたこと



幼児期から今までに、ケンカして大なり小なり相手にケガをさせてしまったことのある子どもは、男子で56%、女子で25%と、思ったより多い。
（図13）

⑤ 2割

これまで先生をなぐりたいと（1度以上）思ったことのある子どもは19%。同じく父親に対して25%、母親に29%、友だちに68%。（図17）

⑥ ケガをするといけない

友だちどうしで、なぐりあいのケンカをしない理由の第1は、「本気になって、ケガをするといけないから」で63%が肯定している。（図19）

提言

ケンカをしなくなっているような、現代の子どもたちの人間関係の浅さに、もっと目を向けようではないか。特に遊びやスポーツの世界の中で、もっとムキになって相手と争い合うような体験が必要だし、その中で自己をコントロールし、感情表出の仕方を学び、建設的なケンカの仕方を身につけていくことが、ある意味で心身ともに健康な成長に欠くべからざるプロセスだと考えられるからである。

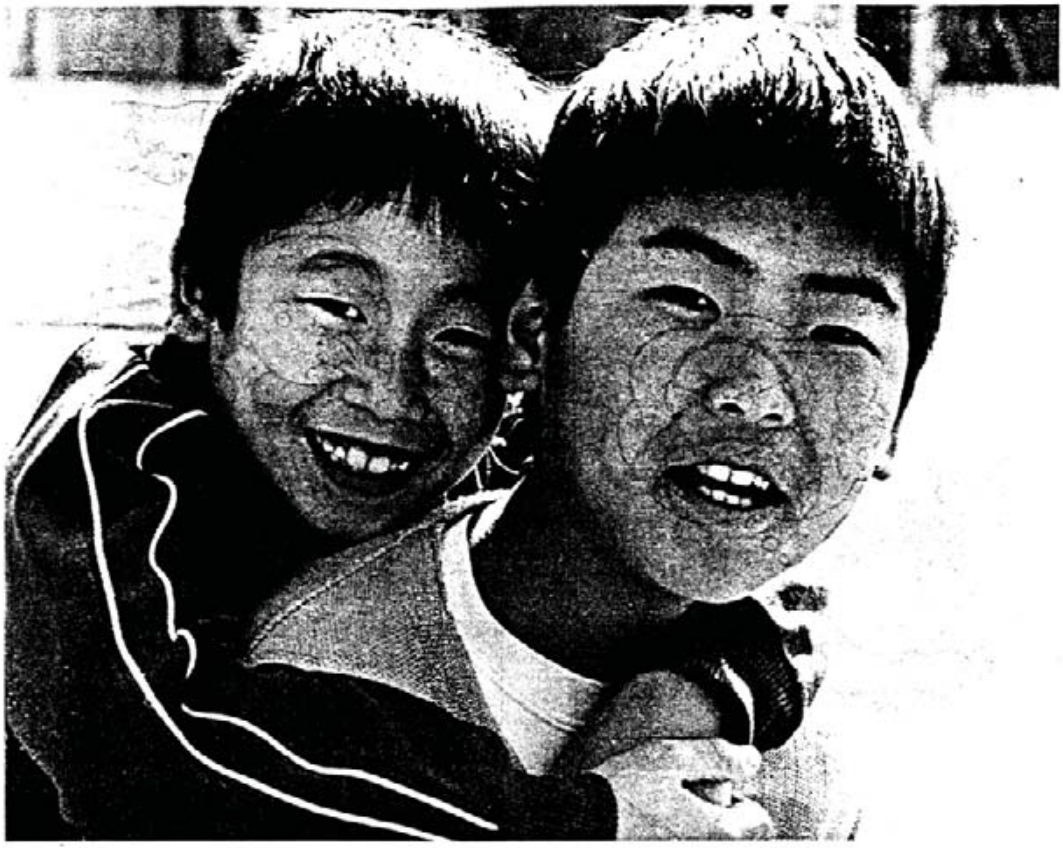
サンプル数　（人）

学年／性	男子	女子	計
4年	292	266	558
5年	288	268	556
6年	243	259	502
計	823	793	1,616

調査概要

対象・千葉県の小学4・5・6年生 計1,616名
時期・昭和57年9月
方法・学校通しによる質問紙調査

1.子どものケンカ体験



最近の子どもたちについて、「子どもらしさ」つまりある種の活力や野性の匂いといったものが、失われてきているという印象を語る人びとが多い。その印象の一端は、子どもたちの間にケンカが見られなくなったことからくるのかもしれない。かつて子どもと言えば、遊びとケンカがつきものだった。きょうだいゲンカをはじめとして、家の内外で、子どもたちどうしの激しい自己主張がくり返され、その間をくぐりぬけて、やがて「おとな」が生まれていった。しかし最近はきょうだいも仲間も少なくなって、ケンカの機会は大幅に減り、そしておそらくその頻度も、比べものにならないほど減ってきているに違いない。

その代わり、時としておとなたちを驚かすのは、日頃おとなしかった子どもが、何かのきっかけで突然カッターを振り回したり、椅子を投げつける、という危険なケンカの仕方、つまり社会化されないケンカの出現である。また他方では最近とみに頻度を増してきたと言われる陰湿なケンカ——「いじめ」の問題がある。

またこうした幼いケンカの中で、自分自身をも他人をも成長させていくことのできなかった子どもたちが思春期を迎えて表出するのが、最近の「非行」「校内暴力」「家庭内暴力」問題なのかもしれない。これらは、社会や地域、学校や親子関係の中に問題があるのはむろんだが、子どもたちの成育史の中から、幼い時期にケンカ体験が失われてしまったことにも、その一因があるのかもしれない。

なにはともあれ、このあたりでわれわれは、子どもたちの成長にとってのケンカ体験の意味を改めて問い直してみることが必要なのかもしれない。

友だちと比べて

まず図1は、ケンカ早いかどうかについての子どもたちの自己評価である。

全体としては、「あまりケンカしない方」が60%。つまり「全くしない」わけではないが「少しは、やっている」というのが今も子どもたちの姿なのだろう。しかし「友だちに比べてとてもケンカする方」と言っている子どもも5%。クラスに2人ぐらいは、ケンカの常連もいることになる。おもしろいのは性差で、巻末に掲げたように、ほとんど性差がないことである。むろんそのケンカの仕方・タイプには差があるかもしれないが。

次の図2はこの点の学年・男女別の数字である。ごくわずかだが学年を追って、数字が減っている。「とても・わりと」ケンカする方、と答えた子どもは、男子で、37%、33%、24%、女子で、38%、23%、23%となっている。女子は5年生で急におとなしくなり、男子は6年生でおとなになる。といった発達勾配の差が見られるようである。

次の図3は、いじめられっ子を念頭においた設問である。クラスの中に「いつもいじめ

図1・ケンカ早さ

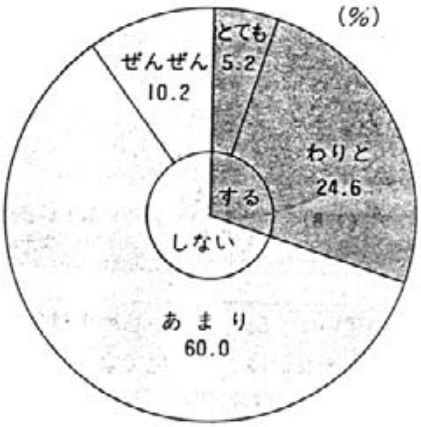


図2・ケンカ早さ(学年・性別)

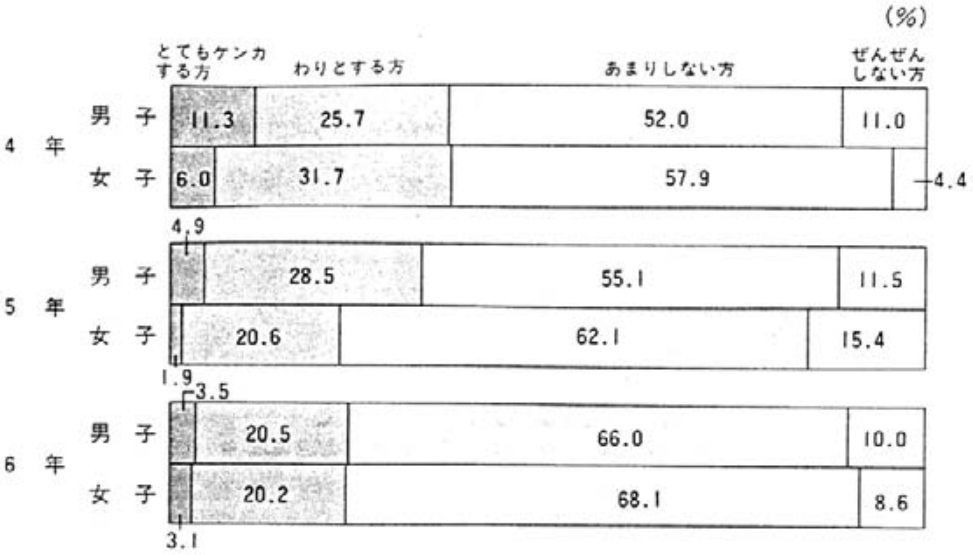
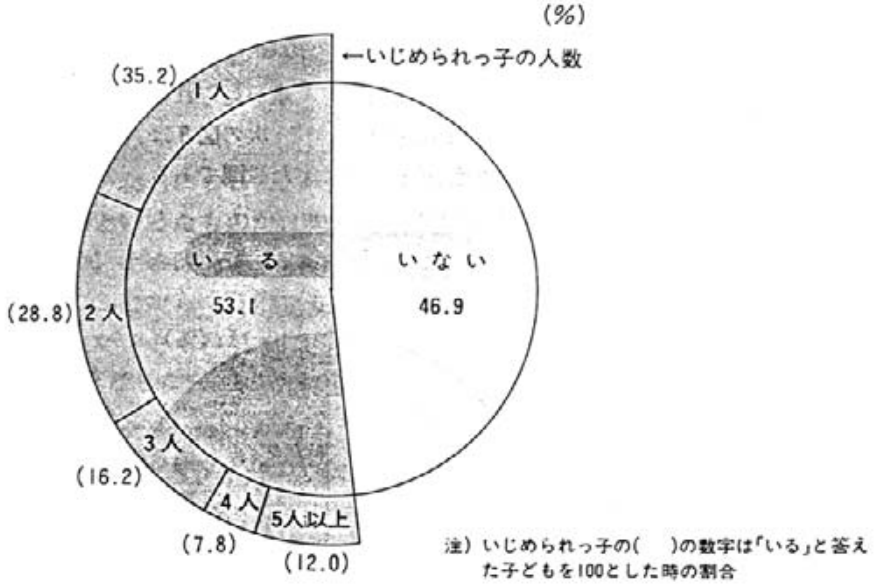


図3・いつもいじめられている子ども



られている子どもがいますか」の問いに、53%が「1人以上いる」と答えている。大まかに言うと、半数ぐらいのクラスには、いわゆるいじめの対象になっている子どもがいる、と見てよいかもしれない。

この1か月で

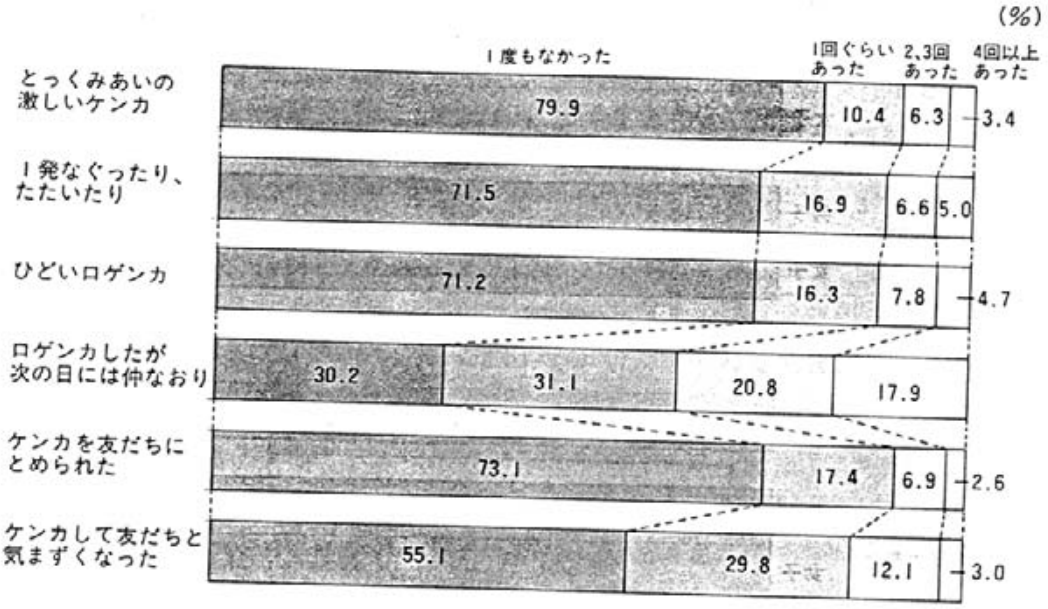
このように、けっこうちょこちょことケンカしたり、いじめたりもしている気配の子どもたちだが、それではその内容やケンカのレベルはどんなものか。次に図4を見てみよう。

この1か月間のケンカの頻度を尋ねたものだが「とっくみあい」をしたことが1度もなかった子どもが80%、「相手をなぐった」ことのなかった子どもが72%、「ひどいロゲンカ」をしたことがなかった子どもが、71%と、ほとんどの子どもが大きなケンカとは無縁に過ごしている様子がわかる。しかしこの数字は裏を返せば、2～3割は、けっこう1度以上激しいケンカをしているということにもなる。とっくみあいを4～5回以上もやっている子どもも、3%はいるし、1発なぐったことが4～5回以上もある子どもも5%はいるという数字が見られる。個人差が、昔より大きくなってきていると見るべきなのだろうか。

しかし激しく大きなケンカはしていないものの、小さなケンカは、けっこうやっている気配が見られる。「次の日には仲なおりする程度の軽いロゲンカ」をこの1か月に1度もしなかった子どもはわずかに3割。残りの7割は1度以上の軽いロゲンカをしている。

しかしこれとても他のレベルのケンカに比べれば確かに頻度は多いものの、小学校の4、5、6年生という年齢を考えると、1か月間に翌日には仲なおりする程度の軽いロゲンカさえ1度も経験していない子どもが3割。たった1度だけ、という子どもを加えると、6割がほとんどロゲンカさえしていない、という状況は、どうも不思議な感じがする。いったい成長ざかりの子どもたちが、これでよいのだろうか。

図4・この1か月間にケンカした頻度



しかも「ケンカを友だちにとめられた」の項目に見い出されるように、ケンカが少ないのは、ケンカになりそうだったのを、友人が止めに入ってくれて、そのために辛うじてケンカせずに済んだ、というのでもなさそうである。もしかしたら、本気になってケンカするほどの深いかかわりが、子どもたちの間に形成されていないことを、このデータは意味しているのかもしれない。

これらの点について性差と学年差を見たのが図5・図6である。性差については、いずれのレベルでも女子に頻度が少なく、学年差については、やはり高学年になるにつれてあらゆるレベルでケンカの頻度が少なくなっている様子がわかる。

また図7は、さきに図1に示したケンカの自己評価と、これらのケンカ頻度との関連を見たもので、図が示すように、「よくケンカする方」と答えた子どもはやはりあらゆるレベルのケンカを、「しない方」と答えた子どもより多くしている。特に「とっくみあいの激しいケンカ」の頻度が両群で差の大きいことに気づく。ケンカをよくする子どもとは、小さなケンカをよくするというより、激しいケンカをする子どもなのだろう。

図5・この1か月間にケンカした頻度(性別)

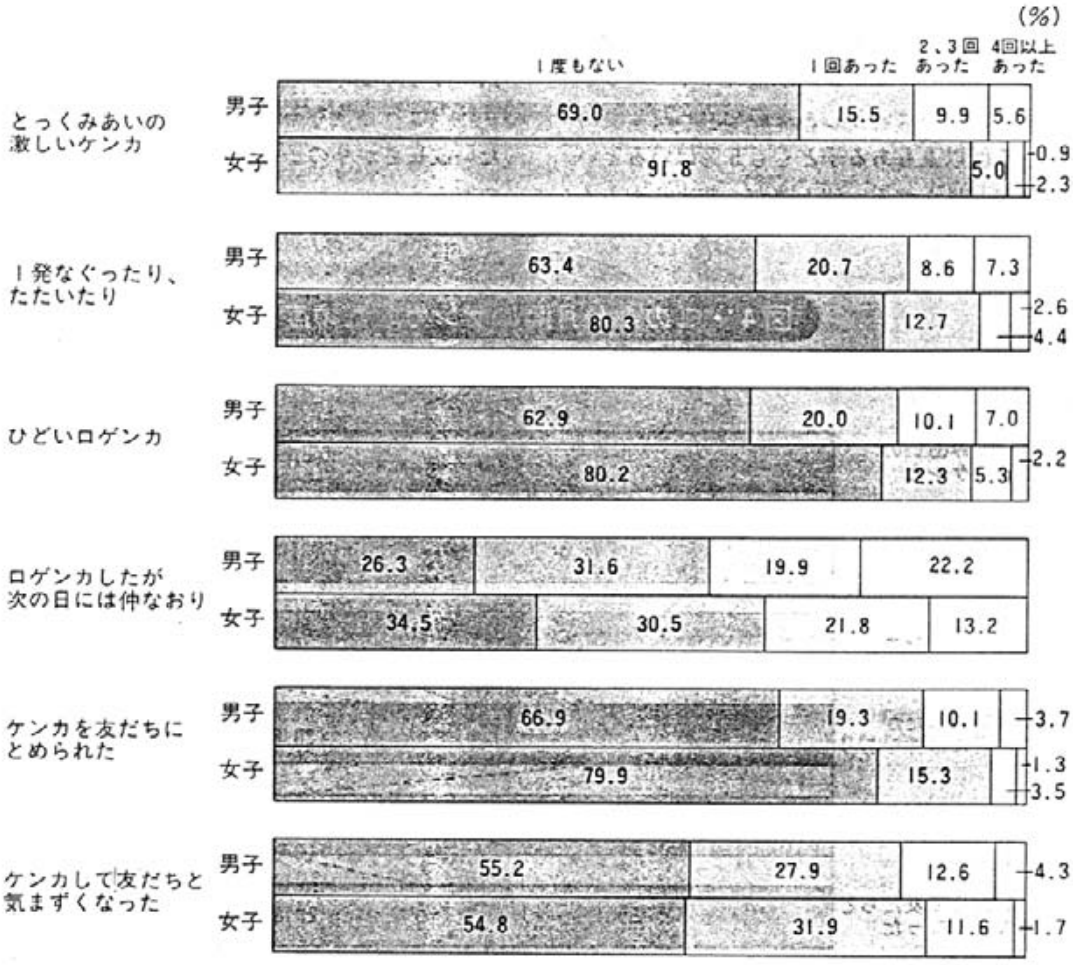


図6・この1か月間にケンカした頻度(学年別)

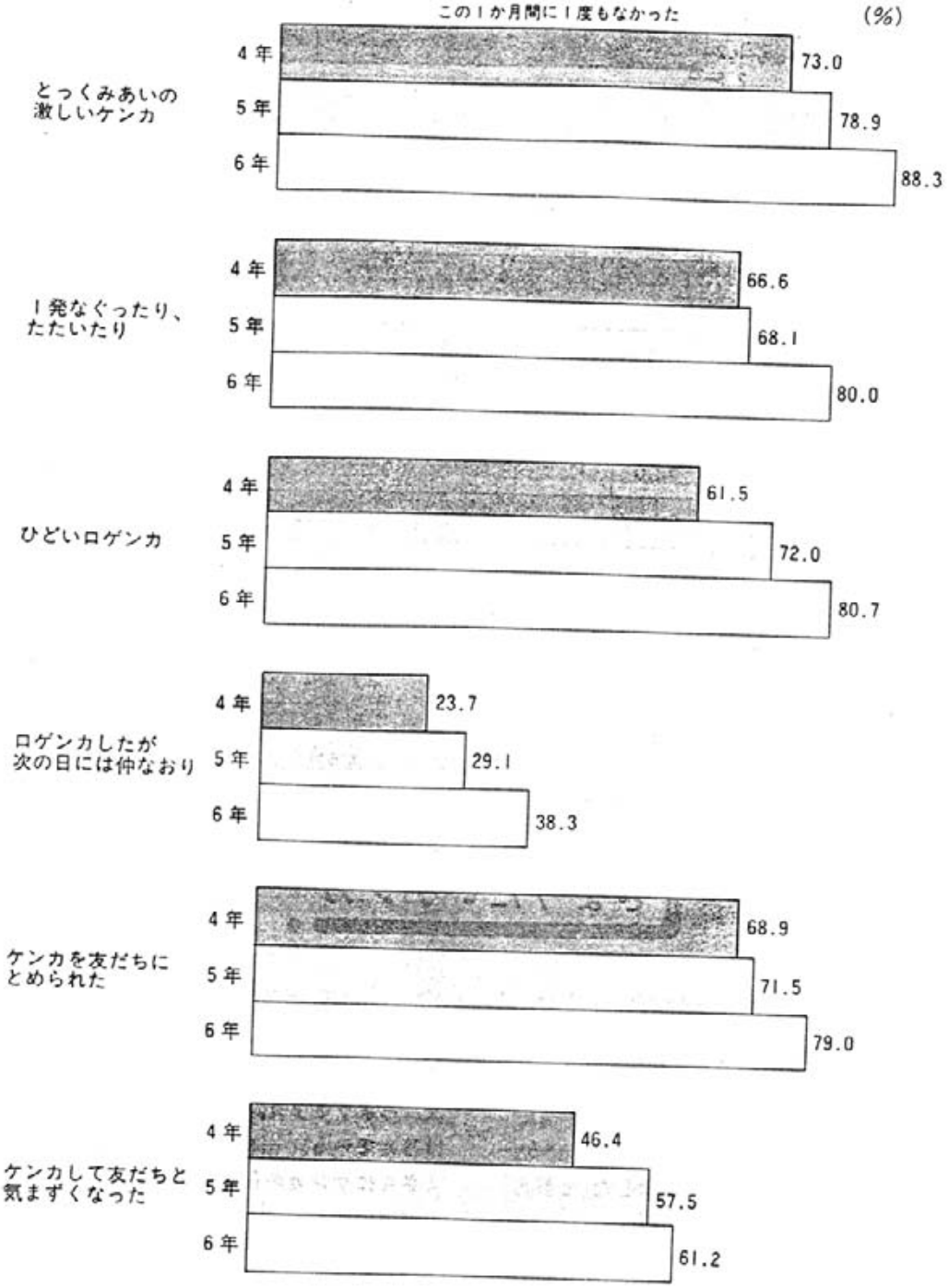
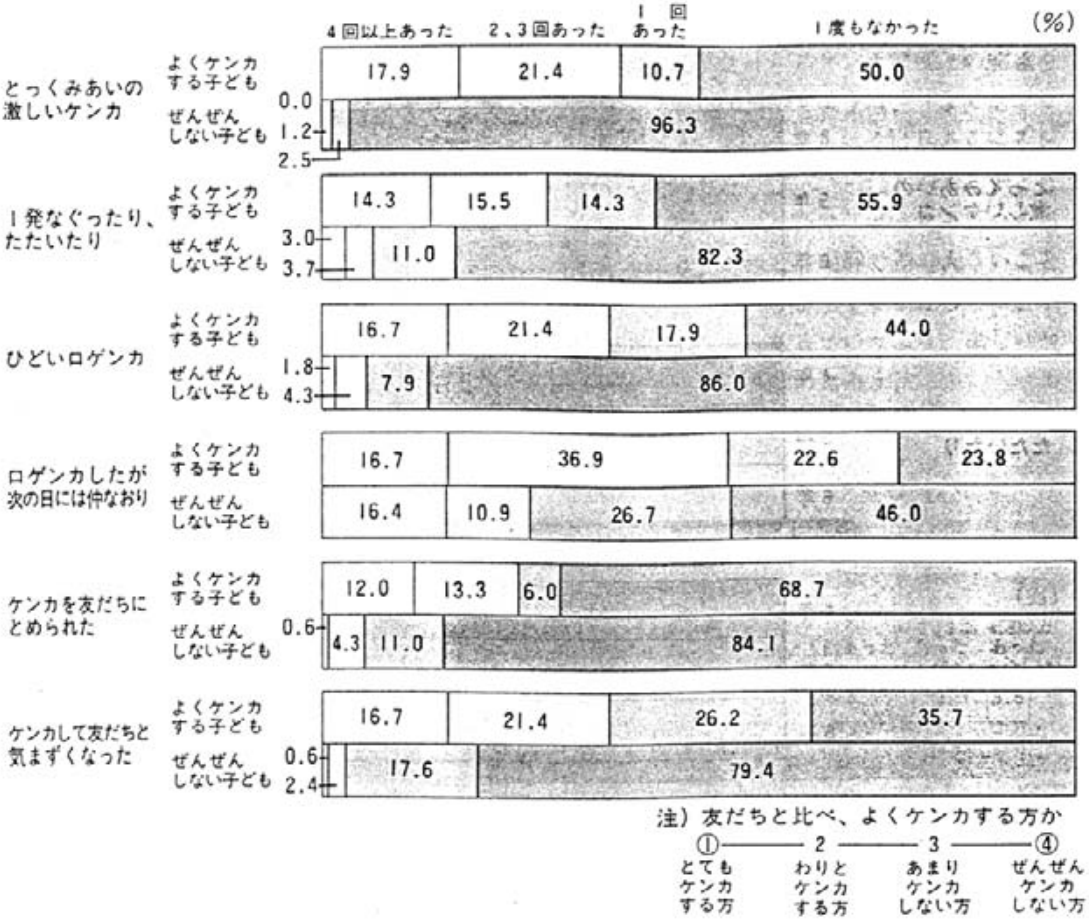


図7・よくケンカする子どもとしない子ども（1か月のケンカ頻度の比較）



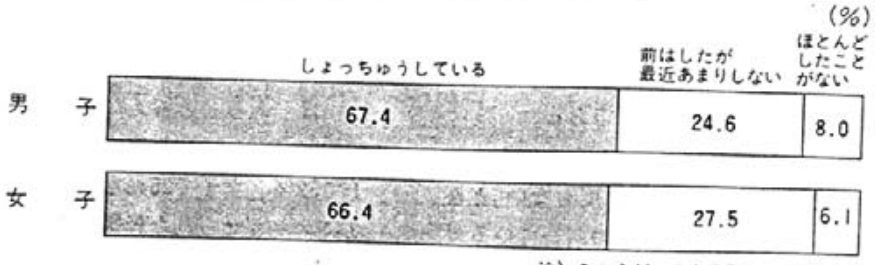
きょうだいゲンカ

さてここで少し角度を変えて、きょうだいゲンカを見てみよう。図8に示したように、友だちとのケンカと違って、今もきょうだいゲンカはしょっちゅうしている様子である。3分の2の子どもが「しょっちゅうしている」と答え、残りのほとんども「前はした」と答えている。つまり人と人との深いかかわりのある所には、今でもケンカや対立があろうことを、この図から推測できよう。

しかも図9できょうだいゲンカと友だちとのケンカを比較させてみると、「より乱暴にケンカできる」のは友だちよりきょうだいゲンカの方と子どもたちは答え、特に女子はその傾向が強い。また「本気でケンカする」のも友だちよりきょうだい相手の時と、特に女子は答えている。

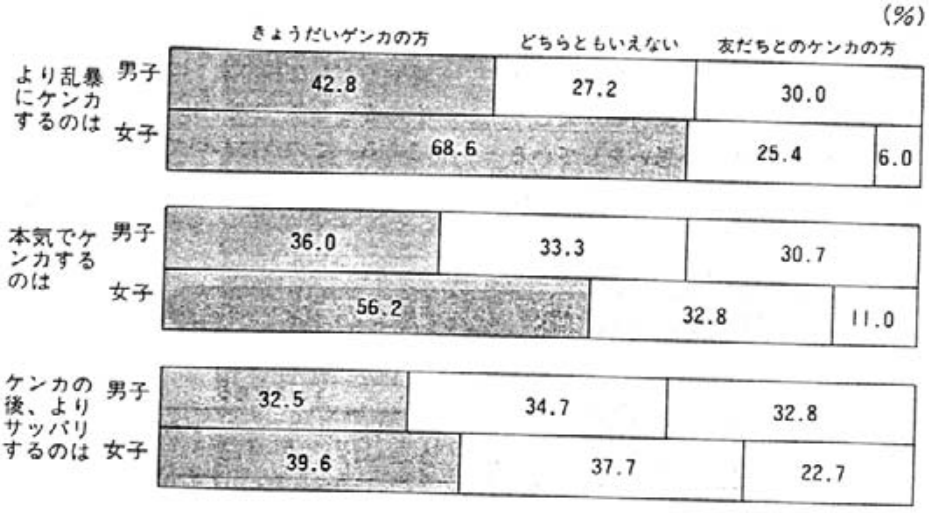
さらにケンカの後の気持ちだが、男子についてはいずれがサッパリするか、についての差はないが、女子の方はやはり「友だちとのケンカより、きょうだいゲンカの方がサッパリする」と答える者が多い。女子が攻撃性を社会的な場であらわにしないようなしつけは、

図8・きょうだいゲンカの頻度



注）きょうだいのある子どもについて

図9・友だちとのケンカときょうだいゲンカ



今も行われているのだろう。それだけに女子は、きょうだいを相手にうっぷん晴しをし、ケンカの仕方を学んでいることになるのだろう。

生まれてから今までに

さて次に子どもたちの成育史をふり返って見ることにしよう。最近1か月のケンカの様子は今まで見てきたとおりだが、そのもっと前はどうだったのか。まず図10、図11を見てみよう。各種のケンカの仕方について、これまでの体験を尋ねたものだが、その体験量の多い順に並べてある。

まず全体をとおしてわれわれが感じるのは、子どもたちのケンカ体験量の少なさではないだろうか。年齢が少なくとも10歳になるまでは、特に男子の場合これらの各項目のほとんどに、「何度もある」と答えることのできる体験量を持っていても不思議ではないように思う。中でも1番よく体験されている「相手を泣かせた」ことがあるですら何度もある子どもはわずか34%。「相手をひっぱたいた」ことの

ある子どもは32%。「けとばした」ことのある子どもが27%、「ひっかいたりつねったり」が26%、「とっくみあい」24%、「石や物をぶつける」5%、「棒でたたく」4%と10年間の体験量としてはまことに貧弱である。

むろん忘れてしまった体験もあるだろうが、それにしても生まれてから「1度もない」と答えている子どもすら、かなりの割合でいるではないか。図11に示したように、ここでも性差はあるが、思ったよりは少ない、とも言えそうである。

次は図12「1対数人のなぐりあい」の体験である。よってたかって相手からなぐられたという危機的な場面を体験したことのある子どもは、男子で28%、女子で7%。これらを多いというか少ないというかは、判断の難しいところだが、けっこうこわい思いをしている子どもも一部だがあるらしい。この点ではさすがに男子の体験量が圧倒的に多い様子である。

さて図13は、どんな形にせよケンカで相手をケガさせたことのある子どもの割合である。ここでも性差はきわめて大きい。「数えきれないほどある」と答えた者はさすがに少ないが、「何回かある」と答えている子どもは、男子で52%、女子で25%もいる。また図14は、逆にケガさせられた経験だが、男子はケガさせた割合とほぼ同じ割合。女子は、やや多目に被害者の立場に身を置いたことがあることを示している。こうしたケガの体験は、おそらくその受けとり方で、ケンカの抑止力として働くことも考えられる。つまりケガを過大に「大変なこと」ととらえるか、それとも昔の親や子どもたちのように、「ささいなこと、よくあること(特に男子にとっては)」と見るかである。この点については、章を改めて見ていくことにしよう。

図10・生まれてから今までのケンカ体験

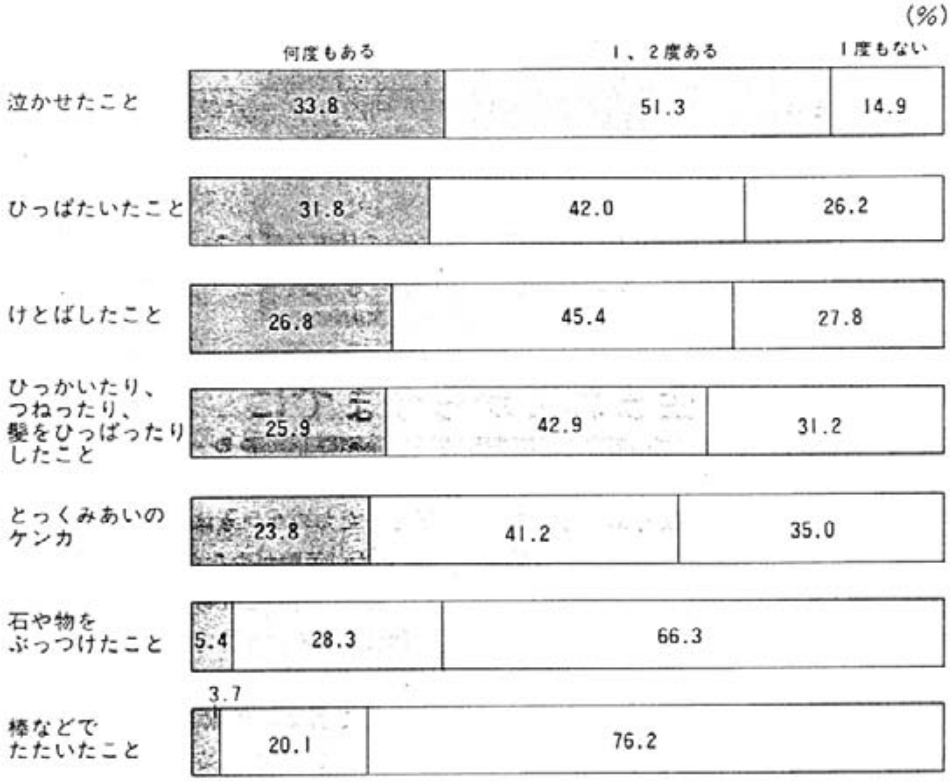


図11・生まれてから今までのケンカ体験(性別)

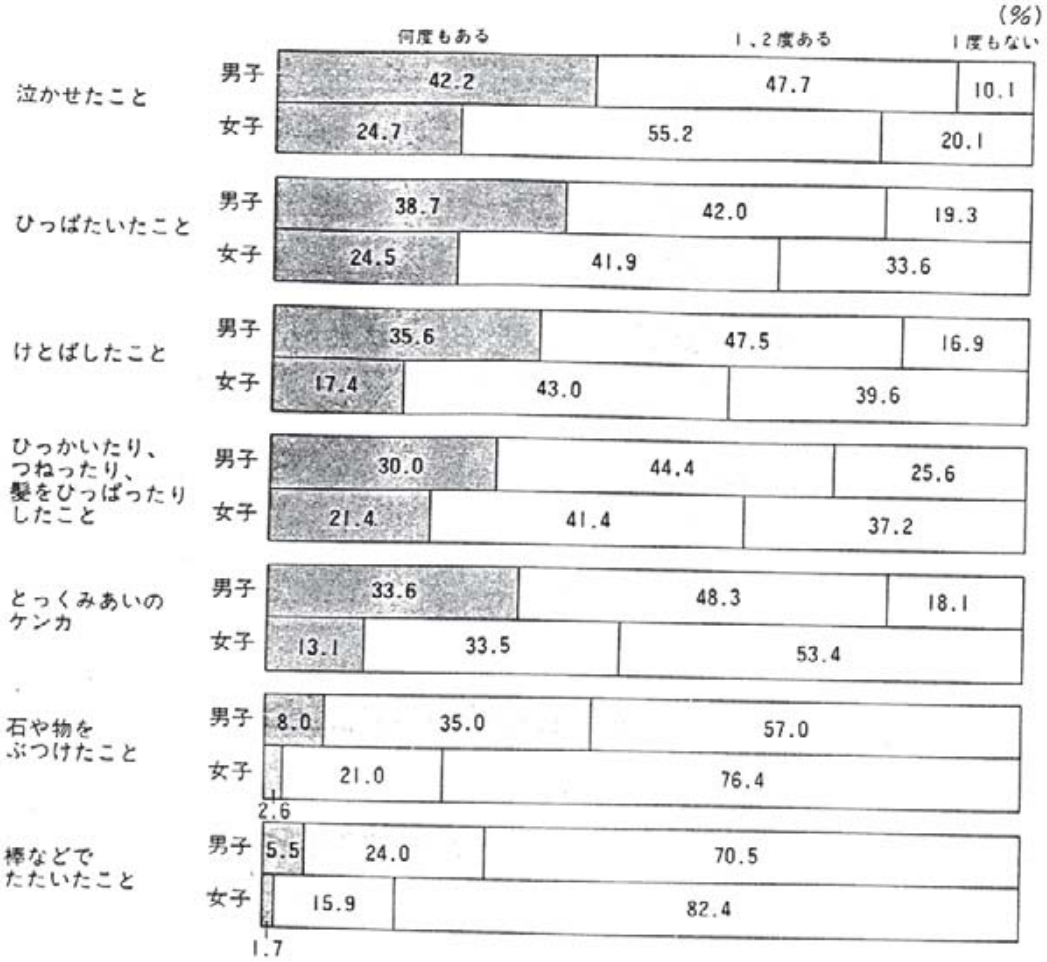
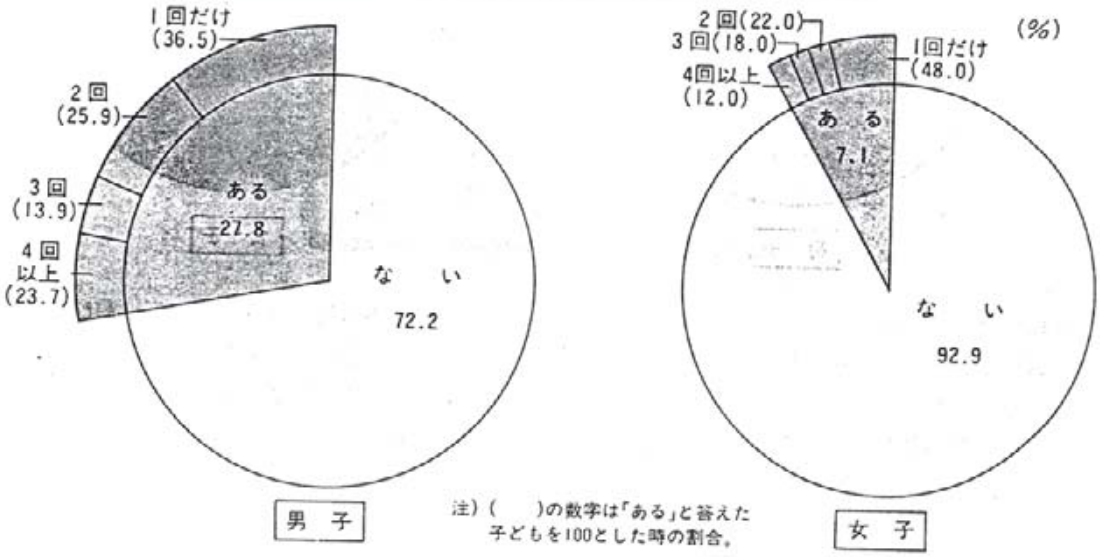


図12・1人対数人のなぐりあいのケンカ体験



注)(　　)の数字は「ある」と答えた子どもを100とした時の割合。

図13・ケンカして、友だちにケガをさせたこと

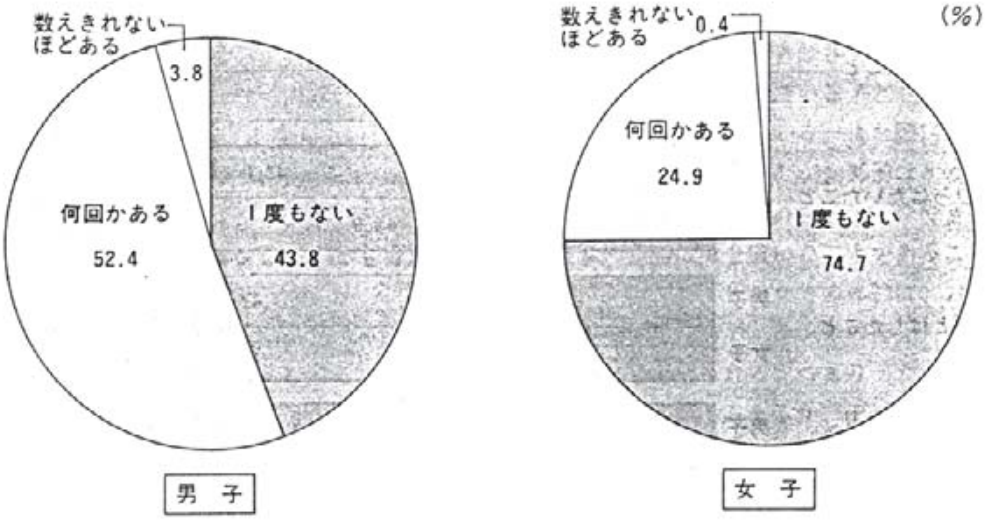
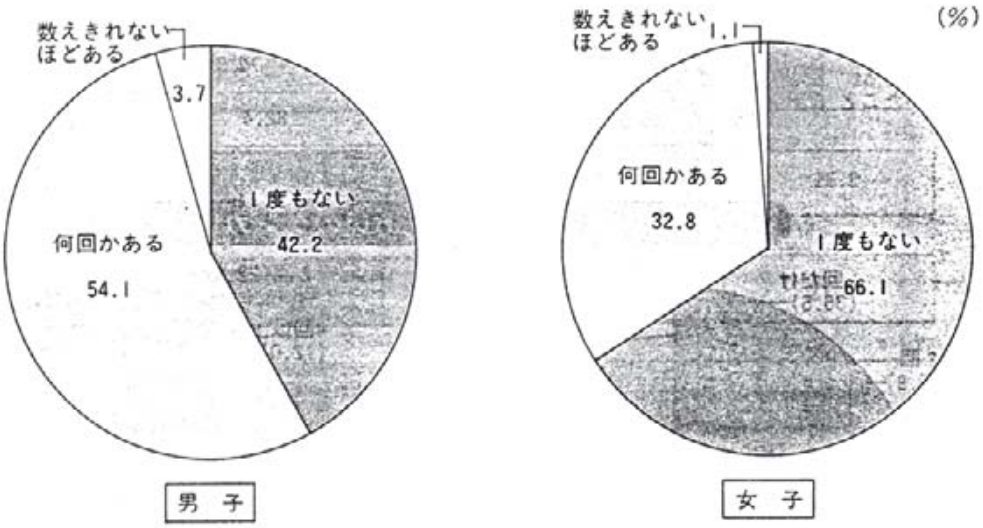
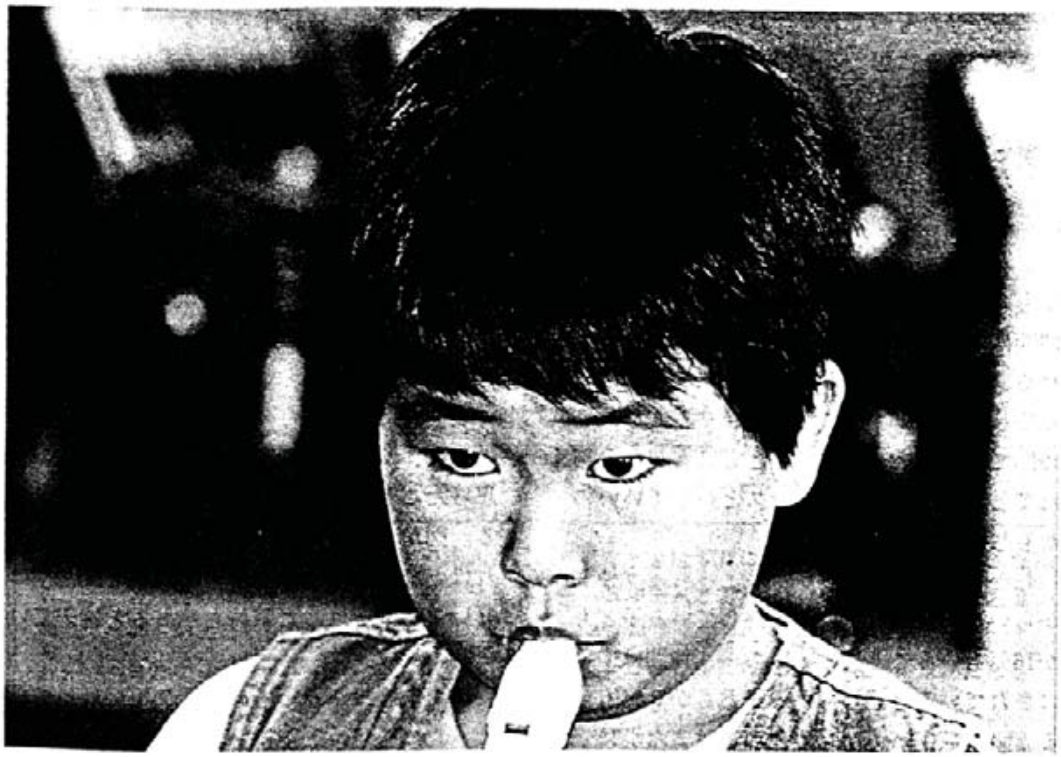


図14・ケンカして、自分がケガをしたこと



2. ケンカ体験と心のうち



さてケンカ体験の実態を見てきたところで次はその背景ともいうべき部分に目を注いでみることにしよう。

前章で子どもたちのケンカ体験が少ないこと、そして特に激しいケンカの体験が少ないことを見てきたわけだが、なぜそうなのか。子どもたちの中に、ケンカのタネ、つまり欲求不満のタネが減ってきているのか。それとも親や先生のしつけなど外からの抑止力が強く働いているためか。それとも子どもたちの中にケンカをするだけの活力が失われてきているのか。探ってみよう。

生活の中のストレス

図15は、子どもの日常生活の中で、よく起こりそうなストレス場面を設定して、そうした体験の頻度を尋ねたものである。図は「しょっちゅう・わりとある」の割合の多い順に並べてある。図が示すように、仲間どうしのトラブルは、日常生活の中でけっこうあるようである。「友だちからいじわるされたり悪口を言われてすごく頭にくる」ことが「しょっちゅう・わりとある」子どもは42%にもなっているし、「ゲームやスポーツに負けてくやしい」と思うことも、38%の子どもがわりとあると答えている。

ちなみに表1は、子どもたちに「今まで一番くやしかったこと、腹のたったこと」を自由に書かせたものである。おとなから見るとささいなことに思えるものも入っているが、子どもたちは子どもたちなりに悩むことがあるのだろう。特に友人間でのトラブルが、子どもたちにとって、一番心の傷になるものであるらしいことがわかる。

しかしそうしたトラブルは、たいして深刻なものではなさそうである。「クラスからの仲間はずれ」を感じる子どもは9％とわずかだし、「親や先生から叱られて気分がおちこんでしまう」ようなことも、わりとあるのは19％でしかない。大体の子どもは、わりと忘れてしまえる程度のストレスといっていいのかもしれない。

しかし少数ではあるが、しょっちゅう仲間からいじわるされていると感じている子どもが16％もいること。しょっちゅう仲間はずれにされていると感じている子どもが3％もいるという数字は、ケンカ要因とはまた別に、学級経営上の問題点として、考えてみなければならないだろう。

ではそうしたストレスに対して、子どもたちはどんな抵抗力を持っているのだろうか。図16は、「イヤなことがあっても、すぐ忘れてしまいますか」と尋ねた結果である。

「その日のうち、または1晩寝れば忘れてしまう」というサッパリ型が合わせて34％。思ったより多くない数字である。それでも「2－3日すれば忘れてしまう」を合わせると、70％はこうしたイヤなことに対して、健康な回復力を持っていると言えるだろう。しかし残りは執着型とでも言おうか。中に「何か月も忘れられない」というのも12％ほどいて、かなりの数字になっている。これでは何かのストレスを受け、心理的な外傷体験を受けた時、できれば相手をやっつけてしまいたい、という気持ちにかられるのは当然だろう。

こうした点を見たのが、図17である。何かの折に、「友だちや親や先生を、なぐりたいと思ったことがありますか」に対する反応である。図が示すように、親や先生に対してはそれほどではないが、友だちに対しては、やはりけっこうそうした気持ちがあると答えている。

また割合は少ないものの、先生に対してなぐりたいと思うことが「わりとよくある」と答えている子どもも4％いることも、記憶に止めておかなければならないだろう。小学校段階での教師に対するこうした感情はどこからくるのだろうか。中学校での校内暴力、特に対教師暴力の一部の根は、このあたりにすでにあるのかもしれない。

図15・生活の中のストレス

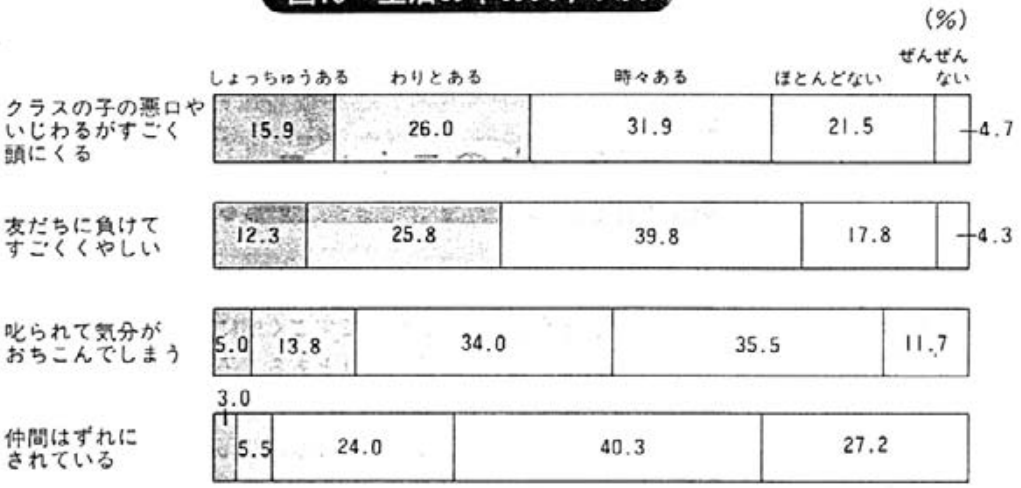


表1・今まで一番くやしかったこと・腹のたったこと

①《男　子》

＊自由記述から抜粋＊

友だちとケンカしてなぐられたこと	・幼稚園の年長の時に、友だちと自転車で遊んでいたら、ぼくが先頭になるんだと言ってけんかになって、友だちがぼくの右目をパンチして目がまっかになった。そして、友だちのおばさんがあやまりにきた。 ・7月ごろ神社で野球をやってたら、○○くんがうてないので、みんなにアウトになっているとか言ったら、けっとばしたり、頭をたたかれたり、ずっとぼくがかえるまでぼくの悪口を言っててくやしかった。 ・友だちと遊んでいて、ボールを片づけるとき、「おまえが片づけろよ」と言いあいになって、けんかして、ぼくが相手をビンタして、それでぼくはやめたけど、相手がほかの人に悪口を言って、ほかの人がけっとばしたら、相手が逃げてゆきました。 ・最初、口ゲンカをしていたが、相手がいきなりなぐりました。でもぼくはなぐりませんでした。ぼくは口でいいかえしました。そしてまたなぐろうとしたから、持っていた本でよけました。それで、本で頭をたたきました。5～6回なぐられました。でも、ぼくはなぐらないで口で言い返しました。ぼくは、なきそうになったら帰りました。
いじめられたこと	・日本にひっこしてきたとき、外国人と言われ、なかまはずれにされ、グループやゲームなどに言れてもらえなかったこと。そして、ある日中国人と言われ、かっとなったとき右目の下のところをなぐられた。 ・自分が目が悪くて、コンタクトレンズをやっていることを言われた時や、いやなあだなを言われた時。 ・4年の時に、○○君のひきだしがなくなった。組の人たちにぼくが隠していないのに、「隠したんだろう」と言われたりして、すごく腹がたった。
友だちに裏切られたこと	・友だちが遊べないと言っていて、友だちの家の前をとおったらほかの人と遊んでいて腹がたった。 ・3年の時、○○君と自転車の交換をして遊んでいて、ぼくの自転車にのって、どっか行ってしまって、よっぽどたってから来て、他の人と広場で遊んでいたからおそくなったと言って、○○君がぼくに「くればよかったのに」と言ったから腹をたてた。
いじめっ子に対して	・○○くんがほかの人に命令してへんなことをやらせる。あまり友だちのいないせいだと思う。つきあっている人もいやがっている。じまんしたりする。悪いやつ。 ・相手がいやがっているのに、乱暴な子が無理やり命令しているのをみて、とてもくやしかった。 ・ぼくの友だちが、昔と性格がかわっていて、遊ぶ時に、昔なら何人部屋に入っても気持ちよく入れてくれたが、今では、たくさんくると、「なんだよ、○○はいいけど他は帰れ」と言う。ぼくは入れたけど入る気にならないでぬけだした。性格が変わったことが腹がたった。
なぐられたこと	・先生になぐられたこと。 ・5年の時、遊んでいたら、中学生の人が数人でたたいたりしたこと。 ・家でおねえちゃんがたたいたので、腹がたってけんかをして、テーブルでたてをつくって、鉛筆の投げ合いをしたりする。
負けたこと	・野球に負けたこと。 ・ＴＢＳ音楽コンクールで、○○○小に負けたこと。

②《女　子》

友だちとケンカしたこと	・私がなわとびを持って、別なので遊んでいたら、勝手に人のなわとびを使うので、「使わないで」といったら、悪口をいうから、私もいってやったら、たたいたり、ひやかしたりしたこと。 ・友だちが私のおなかを指でつっついて、私がやめてと言って注意したら、友だちがけったり、なわとびでたたいたりしてきて、「おまえの方が多いだろ」と勘違いをしていたから腹がたった。
友だちに悪口を言われたこと	・友だちが、かげでコソコソと人の悪口を言うのがとても腹がたった。 ・友だちが、私のかげ口をちがう友だちに言い、その友だちがその悪口を私にいいに来た時。 ・悪口を言われたり、仲間はずれにされたり、一番仲のいい友だちにたたかれたりしたこと。 ・幼稚園の時から、小学校３年生の時まで、みんなから「首まがり」と言われていたことで、とても腹をたてたりした。
友だちに仲間はずれにされたこと	・友だちとグループになったとき、わたしだけ仲間はずれにされたこと。わたしが椅子をひくと、後ろの友だちは、私をゴキブリ扱いのようにうしろにさがってブツクサ言っていたこと。 ・友だちの○○さんと△△さんと××さんが遊んでいて、私があとから遊ぶのを入れてもらったら、仲間はずれにして、わざと私と口をきかなかったりしたこと。私は別に何もしていないけど。 ・修学旅行の前の日、係別に調べ物をしていていた時、ある係がまちがって連絡をした。そして、その係の人が泣きながらあやまったんだけど、他の女子はあやまらなかった。そうしたら、あやまった人たちが、あやまらなかった人を無視した。関係のない私たちまで無視されていたので頭にきた。
いじめっ子に対して	・今はないが、５～６人の団体で無視している人と口をきくと、自分もその団体の人に無視されてしまう。 ・５年～６年のはじめ、二人の友だちと私がけんかした。「図書館へ入れば」といっても、むすっとしたまま。ある人をいじめたので「かわいそうでしょ」といったら「だって」と言って何も話さなかった。そのことが一番くやしかった。
友だちに裏切られたこと	・○○さんのお母さんと一緒に映画につれていってくれると約束したのに、「やっぱりデパートに行くから行かないにしよう」なんて、ずっと前から決めてたのに頭にきた。 ・２年頃、一緒に帰る約束をしていたのに、友だちが私だけおいて、いつも帰ってしまったこと。 ・ある人が、自分が悪いのに、お母さんに自分だけがいいふうに言って、相手の人の家に電話をかけて、相手をしかったこと。
母に叱られたこと	・兄が先に手を出してきて、ケンカになった。私が負けそうになったので母の所に行った。そしたら、母は私ばっかりおこって兄には、全然おこらなかった。 ・私がテレビを見ているとお母さんが「ふとんを敷いて寝なさい」とけっとばして言うので腹がたって、言うことをきかなかった。だから、お母さんとあまり口をきいていない。
いじめられたこと	・そうじの時、班の男子（３人）が、私たちは一生けん命やっているのに遊んでいる。注意してもハエ（死んだ）なんかを投げてきた。私なんかは一生けん命やっているのに。 ・帰るとき、ランドセルと花の種を２人で渡しあいっこして、長い時間返してもらえなかったこと。

③《自由記述例》

日本にひっこしてきたとき、外国人と、いわれて、なかまはずれにされ、グループや、ゲームなどにいれてもらわなかった。そして ある日中国人といわれかっとなったとき 右目の下のところをなぐられた。

・今はないが、5~6人の団体で無視している人と口を聞くと、自分もその団体の人に無視されてしまう。

ようちえんのねんちょうのときに友だちと自転車で遊でいたらぼくが先頭に立ったら友だちがぼくが先頭になるんだと言ってけんかになって友だちがぼくの右目をパンチさせられて目がまっかになった。そして友だちのおばさんがあやまりにきた。

友だちとグループになったときわたしだけなかまはずれにされたこと。
わたしがいすをひくと、うしろのともだちはわたしをゴキブリあつかいのようにうしろにさがってブッつけいっていたこと

ようちえんのときから小学校3年生の時までみんなから「首まがり」といわれていたことが、とても腹をたてたりした。

1. 野球でまけたこと。
2. あいてがいやがっているのに、ちんぼうなさが、むりやり、めいれいしてるのをみてとてもムかしかった。

図16・イヤなことを忘れられるか

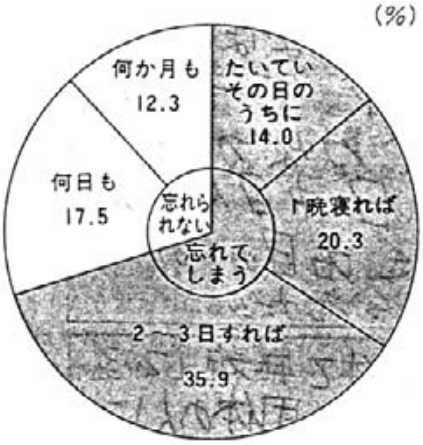
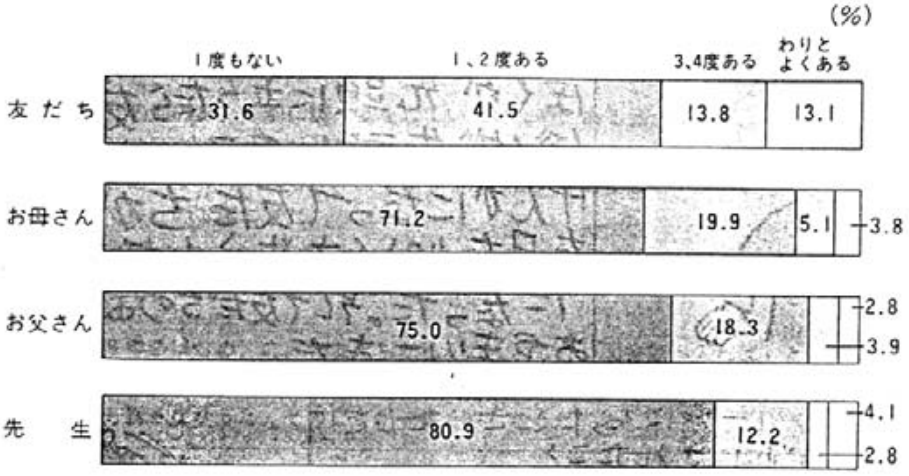


図17・周囲の人をなぐりたいと思ったこと



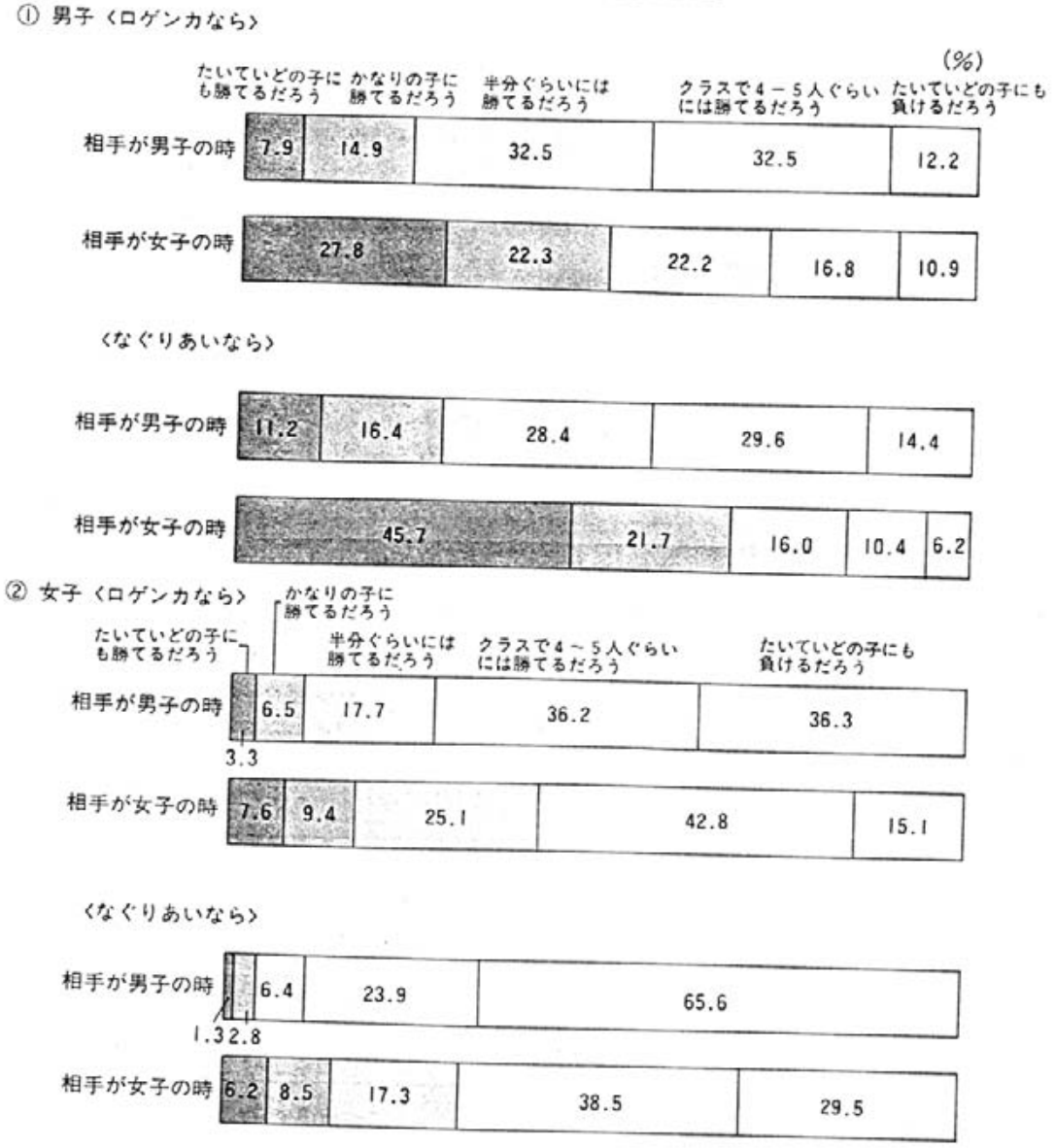
なぐりあいをしない理由

さてこうしたストレスの存在、そして自分の気持ちをおさめかねることもあり、時には1発なぐってやりたいとすら思うことが、ないではない。にもかかわらず、昨今の子どもたちが、なぐりあいのような激しいケンカをしないのはなぜだろうか。

まず図18はケンカに勝てる自信のほどを聞いてみたものである。もしかしたら、自分の腕力に自信を持つようなケンカ体験が減少してきたため、今ひとつ手出しができなくなってケンカが減っているとも考えられるからである。

しかしこれで見ると、自信のほどはけっこうあるようである。男子について見ていくと、なぐりあいの場合クラスのたいていどの男子の友だちにも勝つだろうという剛の者は11%

図18・ケンカに勝てる自信



に過ぎないが、それでも「クラスの半分ぐらいの男子には勝てるだろう」と答える子どもまでを合わせるとちょうど56%となる。相手が女子だとその割合は一層増加し、83%にもなる。ロゲンカの場合も同じようなものだが、相手が女子の場合は、なぐりあいほどの優位は感じていないようなのがおもしろい。しかし一部ではあるものの、相手が男子だろうと女子だろうと、なぐりあいだろうとロゲンカだろうと、「たいていどの子にも負けるだろう」と考えている弱い男子も出現している。項目によって多少差があるが、対男子の場合12～14%、対女子で6～11%となっている。

女子は、やはり男子には圧倒的に弱い自分というとらえ方をしている。特になぐりあいだと66%の女子が、男子にはほとんど勝てな

いだろうと言っているし、口ゲンカでも36%がそう感じている。はた目には女子が強くなったようにも見受けられる昨今だが、彼女たちの意識の中は、そうでもないらしい。もっとも、たいていどの男の子にも（なぐりあいで）勝てるだろう、というワンダーウーマンのような女子も1%いるし、「かなりの男の子に勝てる」を合わせると、その割合は4%にも達している。

さてケンカにはそれほど自信がないわけではないが、それでもケンカをしない理由は何か。なぐりあいのケンカに例をとって、見てみることにしよう。

図19は、ケンカをしない8つの理由について、肯定率の高い順に並べてある。上位の3つは、「ケガをするといけないから」「本気で腹のたつことがないから」「ケンカしたら友だちでなくなるから」という結果を気にして今ひとつカッとなれない子どもたちや、逆にそれほど腹をたてることがないのでカッとならない子どもたちの姿である。

残りの5つは、たいして大きな肯定率の差がない。どの理由も少しずつは含まれているが、キメ手というほどではない、というのが子どもたちの気持ちだろう。

つまり子どもたちは、結果が気になって、今ひとつケンカに対して積極的になれないと言ったところが、正体なのかもしれない。

図19・なぐりあいのケンカをしない理由